

## 第2講 記憶と歴史、そして文化史

### 【前回レポートの講評】

歴史小説（ドラマ）と歴史学を二項対立的に捉えるレポートが圧倒的に多かった。歴史小説（ドラマ）には「主観的」・「フィクション」・「娯楽」・「創作」・「脚色」・「個人の心情」などの言葉が並び、歴史学には「客観的」・「事実」・「学問」・「間違いの無い」などの言葉が列挙され、両者の相違点が強調される内容となっている。

しかし歴史学が研究の基礎としている史料への疑問が見られないことは未熟さを感じられる。つまり史料にフィクション性の可能性が残されていることへの視点が欠落しているということである。第二に歴史家による研究に脚色・誇張といったことが排除されるのだろうか。近代の歴史学が「民族史」「国民史」という枠組みの中で構築されてきたことの問題点に気がつく必要があるだろう。第三に歴史学も時代と社会、文化の影響を強く受けていることも重要な問題点である。そのような意味で歴史学の目的が「民族のアイデンティティの確立」にあると指摘していたレポートは近代の歴史学が抱えている根本的な問題点を指摘していたと評価できる。

### 【本日の課題】

人はなぜ過去を記憶しようとするのか？ 記憶に何を求めるのか？

歴史とは：・人間の営為を記録し後世に伝える（ヘロドトス）

偉大な業績が忘れ去られていくことから救うため

忘却（自然）に抗して記憶（人為）しようとする意志

永遠に対する挑戦

記録・記憶に残すという行為

意図して残すもの：日記・切り抜きファイルなど

意図せずして残ってしまうもの：携帯の着信記録など

・記録される記憶の場の問題

どこに記憶されるのか？

何に記憶されるのか？

円山公園の「新聞少年の像」・「ラジオ塔」・「坂本竜馬と中

## 岡新太郎像」

記憶が象徴するもの

昭和という時代を象徴：経済恐慌・戦時体制・戦後復興と  
民主化・所得倍増・三種の神器（テレビ・電気洗濯機・電気  
冷蔵庫）

貧困と苦学・立身出世・近代化・国民動員・革新性への願  
望

記憶の統合機能

共有される記憶は同じ価値観を共有する集団を形成し、  
人々を統合する

（ファンクラブ・野球場・同窓会など）

民族という集団に共有される「集合的記憶」

P・ノラ（1931年～）

ピエール・ノラ編（谷川稔監訳）『記憶の場』（岩波書店：  
2002-03年）

移民の流入によるフランス人の文化的アイデンティ  
ティ喪失の危機

フランス国民の「集合的記憶」

ウェルキングトリクス・フリジア帽など

多民族・多文化社会（移民社会）への批判

グローバル化への批判

国民的アイデンティティへの統合を目指す

ブルカ禁止

単なる記録・記憶は歴史になるのか？

・Historizein(探求する)→History（歴史）

何故、ペルシア戦争が起きたのか。

直接的にはイオニアの反乱にアテナイとエレクトリアが援軍  
を派遣したこと。

原因を探求。「何故」という好奇心。

ソフォクレスの『オイディプス王』と共通

イオニア哲学の産物（神話を批判）

現象（事実）と原因の因果関係。

・ 神話・伝承・オーラルヒストリー

ペルシア戦争という集合的記憶

ギリシア人のアイデンティティ

ヘロドトス自身の危機意識の表れ←東方の強大なペルシア

帝国・ギリシア世界の分裂（スパルタとアテナイ）

・ 歴史の効用：教訓

アジアとヨーロッパという神の定めた世界を順守すること

死ぬべき運命にある人間の限界→アナンケー（運命）を知ること

こと

アポロンとクロイソス：初代のギュゲスの犯罪

傲慢（人としての限界を無視）→忠告→無視→神の罰→賢人

クロイソス、クセルクセス

文化的背景の重要性：

ギリシア人：貧困→英知と法→勇気→専制に屈服せず

(Hdt. 7. 102)

参考文献

ヘロドトス（松平千秋 訳）『歴史 上・中・下』岩波文庫、2007年。